

國學院大學学術情報リポジトリ

築瀬大輔著『関東平野の中世』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 則竹, 雄一, Noritake, Yuichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000459

書評と紹介

篠瀬大輔著

『関東平野の中世』

則竹 雄一

本書は著者の二〇〇四年から二〇一四年に至る中世後期上野国を舞台とする論考を纏めた論文集である。構成は以下の通りである。

序章 本書の課題

第一部 国境河川地域の政治と文化

第一章 新田荘の国境河川地域

第二章 新田領の形成と渡良瀬川

第三章 戦国期渡良瀬川の洪水と水運

第四章 中世仏教の地域的展開と利根川

補論 中近世における渡河点寺院の一事例

第二部 関東の地域構造と利根川

第一章 中世上野の地域構造と利根川―東上野と西上野

第二章 戦国大名の国境政策と利根川

第三章 戦国期関東の地域認識と利根川

第四章 既橋城と利根川

第三部 林産資源の利用と地域社会の成立

第一章 中世村落における平地林の機能と景観

第二章 戦国期桐生領の林産資源と生業

第三章 中世の屋敷林と境内林

終章 中世地域史研究と現代社会

本書の課題の一つは、「関東を代表する河川である利根川のもつ隔絶性と融通性の双方を明らかにした上で、関東及び上野国の地域区分を再構成する」ことにある。関東中世の地域区分論ないしは地域構造論として有名なのは、峰岸純夫氏の「A・B地域論」がある。十五世紀の政治的構造を説明する学説として提起され、関東の政治的構造は、上杉氏守護領国となった上野・武蔵・相模・伊豆（B地域）と鎌倉幕府以来の伝統的豪族層の小山・宇都宮・佐竹・小田・千葉などが盤踞する下野・常陸・下総（A地域）に二分されるというものである。著者は、このA・B地域論について、なぜA・B地域の境界が利根川になるのかは説明されていないと批判した。そして齋藤慎一氏の「地域を隔離する障壁としての」自然条件をもつ利根川に設定された渡河点の交通路としての機能を解明したことを評価した。この上で「渡河点周辺を領域的に捉える視角」が必要とし、「河川の隔絶性と融通性の双方

に関心をもちながら、国境河川の渡河機能をめぐる領域支配の問題として論議し直す」ことを提起する。

第一部第一章では、『松陰私語』を史料として、上野国新田荘で上武国境を形成する利根川での渡河点の確定を行う。そして、この地域での利根川が網状流路を呈する条件の下で、複数の渡河点が群的なしは面的に広がって存在する特徴を指摘した。このような領域を「渡河域」と呼ぶと共に、更にこのような地理的要素と空間構造をもつ歴史的地域を「国境河川地域」と呼ぶことを提起する。具体的には中瀬（小角）・平塚渡、堀口・間々田渡、古戸・長井渡を確定し、足利成氏軍が布陣した「河原」地名に注目して、それぞれの渡の後背地である大館河原・手斗河原、郷八幡河原、佐貫荘岡山原とセットであるとして、「世良田周辺渡河域」「堀口・間々田渡河域」「古戸・長井渡河域」の存在を明らかにしている。

第一部第二章では、横瀬氏の権力基盤と新田領形成の関係为国境河川地域の掌握との関係から説明している。十五世紀新田荘領主岩松氏の権力基盤には利根川対岸の武蔵国側を拠点とする横瀬氏や猪俣党武士団であったが、のち横瀬氏は主家岩松氏に代わり新田領を支配することになり、なぜ横瀬氏が台頭できたのかが問題となる。もともと利根川南岸の横瀬郷を本貫地とする横瀬氏の展開には、上武国境である横瀬渡の渡河点機能を掌握したことに起点があり、さらに主家岩松

氏に頼ることなく、渡良瀬川東岸の山田郡南部地域を譲渡や買得で独自の拠点として確保した。このように利根川と渡良瀬川の両国境河川地域を掌握したことが、十六世紀の横瀬氏台頭と新田領形成の要因と指摘している。

第一部第三章では、山田郡南部のみならず両毛国境を形成する渡良瀬川とその流域地域である両毛国境河川地域に注目して、横瀬氏が「足利・館林長尾氏と協調して渡良瀬川の流域機能を独自に掌握し、伝統的豪族層としての岩松氏を押さえて両毛国境地域に固有の領域支配を展開した」とする。これは「B地域の領主がA地域内に固有な足場を設け、ついに伝統的豪族層の一角を崩したと見ることができるとも指摘する。このような地域統合の特異性をもつA・B地域の結節する境界地域としての両毛国境河川地域をA・B地域の中間地域としてのC地域とする。

第二部では、中世関東の地域区分論と上野国の位置への提起である。

第二部第一章では、十五世紀には利根川を境界として上野国を「東上野」「西上野」に区分する地域概念が存在したことを明らかにした。そして地域概念の成立の基底的理由として利根川西遷と政治的求心力の移動があったとする。つまり、応永三十二年の洪水を契機に利根川は現広瀬川流路から現在の流路に移動して、上野国最大の低地である広瀬川低地帯の

東西交通機能を安定化させるに至ったことである。また、関東における中心的政治勢力（鎌倉公方と関東管領）の拠点が十五世紀後半には鎌倉から関東北部の下総国古河、武蔵国五十子に移動したという歴史的条件があったのである。このことは単に上野国を東西区分するのみならず関東を東西に区分する観念そのものとなったとする。

第二部第二章では、佐波郡沼之上村（玉村町御料）の「石倉文書」六通を素材として戦国末期の上武国境地域の政治と自然環境の關係性を考察する。天正七年を境に北条・武田領国の境界が現在に利根川から広瀬川に東遷したことにより、那波郡域の武田氏による領域支配の再編が行われる。沼之上と柴の利根川渡河点に勢力を持つ石倉氏は、富士信仰の先達、商人的な武士として地域的なネットワークを持つ職能をかわれ、武田氏の東上野侵攻の過程で武田被官と位置づけられたとしている。

第二部第三章では、十五世紀にできた関東の東西区分観念の十六世紀における意味を明らかにする。十六世紀には「関東平野を俯瞰的に区分する観念へと拡大・発展」し、「河東」という用語が、東関東が公方の御座所や関東八屋形の本貫地とする特殊な価値観をもっていたと指摘し、さらに北条氏の北進に際しての「越河」、越後上杉氏の南進に際しての「越山」という用語に注目して、双方の狭間に位置したのが両毛

河川国境地域であり、関東での東西南北境界地域として両毛地域の固有性が認識されるようになったとする。

第二部第四章では、地域区分論を前提として上野国中央部に築かれた厩橋城の戦国時代における位置づけを利根川という自然条件との関係から明らかにしている。厩橋城は大永年間に関東管領上杉憲寛と惣社長尾顕景との抗争を背景に、長野賢忠が利根川西岸の惣社城を攻撃するために対岸に要害を築いたことにはじまる。長野一族は東上野への勢力拡大を強く志向し、厩橋城は東方への軍事展開の拠点と機能し、十六世紀の第四四半期からの上杉・武田・北条三氏の抗争期に軍事的・政治的存在意義が一層高まったとする。さらに織田期においては滝川一益が入城し「東国御一統」政策の実現のために、利根川を越え東関東を見据えた厩橋城の象徴的意味を主張する。

第三部では、関東平野に広く展開する洪積台地の景観を復元するこれが二番目の課題である。その時、洪積台地状に人工的に造成された林である平地林Ⅱ「山」の存在形態と機能に注目する。

第三部第一章では、山地の林に対して平地に存在する平地林は、①領主占有の雑木林（立林）、②地侍が所有の「自分之林」、③郷村の共同利用地の入会林野が存在したことを明らかにしている。これらは燃料・肥料・材木確保用に維持管理

された人工林との共通点をもつ。これを戦国大名北条氏は検地に明確に位置づけている。また、生産領域でない集落内の、地侍の屋敷林や寺社の境内林に注目して木材供給地としての平地林に含めて重要性を指摘する。

第三部第二章では、上野国桐生地域の林産資源の利用状況と地域生業を明らかにする。戦国期の桐生地域は古河公方御料所、公方奉公衆桐生佐野氏、新田金山城主由良氏と支配者を替える。桐生地域は木材、製材、小竹、松苗、薪、炭などの産地であり、主に城郭の普請用材、兵器生産用燃料として利用された。それは桐生川流域山村の「村単位で領主に奉仕する場合」と仁田山衆や小倉衆など「職能集団として把握」の二形態が存在するという。戦国時代の木材・燃料供給が慢性的不足の状態にあるとし、林産資源の乏しい平野部の領主由良氏にとって「豊かな山林を抱える桐生領を併合したことは、林業に関する物的・人的資源の動員という観点からみて、結果的に極めて大きな意味があった」とする。

第三部第三章では、中近世移行期における屋敷林（居住のための樹林）と境内林（信仰のための樹林）の性格と機能を明らかにする。両林の共通な役割について、①建造物を囲む囲繞性、②計画的に維持・管理される人工林、③住人の家の永続、仏神の荘厳の永続を示す象徴性、④自家用・公共用の材木資源供給地としての資源性を指摘し、特に③・④に注目

している。両林の資源性は自家用から地域の公的資源に転嫁するが、これを実現したのは、両林を資源供給地として指定・保護し、一方で解放を促し領内に分配することを展開した戦国期地域権力の登場であつたと指摘している。資源の再分配機能を果たす権力として公共性を体现しているのである。

一九八〇年代までの関東中世史研究は、戦国大名北条氏の研究が牽引して来たが、その後、戦国大名論の相対化と共に北条氏の研究は低調となった。これに入れ替わるように、いわゆるA地域を主なフィールドとする関東中世の研究が進展する。研究を推進したのは、下野では荒川善夫・江田郁夫氏らで、上野では久保田順一氏そして本著者築瀬大輔氏もその一人である。関東中世史が特に戦国期にあつて北条氏領国発展示観が相対化しつつあることは重要であろう。外からの新興勢力である北条氏が関東の伝統的な旧勢力を駆逐・吸収しながら関東の戦国時代像を形成してきた。しかし、関東の内発的な中世史像が、二〇〇〇年代に入り多くの成果が著書として纏まりつつあることは重要であろう。

いくつかの疑問点について述べておこう。

第一部では、大河川のもつ二面性の中で融通性を中心として渡河点（渡河域）の意味を強調する。上野国新田荘の利根川上武国境地域や山田郡南部の渡良瀬川両毛国境河川地域を

具体的な素材としているが、この視点はさらに利根川下流域の地域性を分析する視角となる。筆者の関心から見れば、武蔵・下総国境地域では利根川のみならず古隅田川、江戸川（太日河）などの乱流地帯が展開する下流域を含めて、渡河域の視点は改めて地域構造を再考する必要を示唆する。利根川下流域を見る時、江戸城と平川渡河点、石浜城と隅田川渡河点、葛西城と中川渡河点など十五世紀に登場する城郭が渡河点を含む形で渡河域を形成することが見てとれるのである。

国境河川のもつ渡河機能・水利機能・水運機能を領域支配の要とする「川の領主」概念を設定している。自然環境と歴史的展開を関係重視する著者ならでわの概念設定で、これを普遍化して、「山の領主」「海の領主」と広げること、地域性を反映する領主支配の展開を見通すことに繋がる。しかし、「川の領主」とは「決して『川を主たる生業の場とする職人的武士団』というような意味に特化して用いているわけではない」とすることをどのようにとらえたいのであろうか。おそらく領主そのものの特殊性ではなく、領主が自然環境に規定され、どのような機能を掌握するかによって、領主の特異性が発揮されるとの意味として理解できる。「川の領主」の存在は十分に魅力的ではあるが、しかし仮説的であり、川を起点とする諸機能が地域領主によってどのように掌握・統合されるのかは十分な論証には至っていないように思われ

る。渡河点ないしは「渡河域」を基点とする領域支配の展開が、戦国期の「領」支配へと繋がるとの横瀬氏の事例に比して、他機能と領域支配のあり方の展開乃至関係は説明は十分ではないだろうか。足利領築田地域を出身とする「川の領主」築田・野田・舞木・茂呂氏などが水運との関わりでどのような領域支配を展開させることができたのか。河川に対して垂直に機能する渡河機能とは相違する河川を平行に機能するいわば水運機能との掌握に基づく領域支配には差異があるように思われるが、どのように総合的に理解できるのであろうか。河川領域に生きる人々の生業の具体相の解明と領主の機能把握との関係理解の深化が求められるように思うのである。

第二部では、利根川のもつ隔絶性に注目して「東上野」「西上野」という地域観念の登場とさらに東西関東の地域区分論まで敷衍化する。

問題は第一部と利根川の交流性と第二部の隔絶性の関係とは何かということではないだろうか。著者は、国境河川の両義性を指摘しながら、それぞれはばらばらの論理構成を採用し、統一的理解が不十分なように思われる。これは第一部が、渡河点乃至は「渡河域」という相対的に小さな領域を事例としているに對して、第二部では上野国全体さらに関東全体の利根川を境界とする東西地域区分を事例とするという地

域の次元相違とも関係しようか。

また、新田荘の国境河川地域の特質を踏まえながら、横瀬氏の内発的發展として戦国期の新田領の形成を捉えたことは重要な成果であったと思われる。しかし、一方では「領」支配形成のあり方が敷衍化できるのかについては問題が残る。横瀬氏の本拠の特異性を強調するならば、横瀬氏が主家岩松氏にとってかわり、戦国的「領」を形成できたのは特殊事例となってしまうからである。かつて筆者は、上野国戦国期の領形成についての一端を論じたことがある。当該期の史料に「領」地名が登場する事例を分析して、各「領」に使用事例が永祿年間の長尾景虎の越山時期に集中していることを指摘した。十分な論証はできていないが、景虎越山による関東での味方国衆の領域認定との関係を提起した。勿論、認定の前提として内発的な領主による領域支配の展開が存在したはずであるが、それは「領」と一律に呼称されるには上からの認定があったことを想定させるのである。戦国期の「領」形成は、自然環境に規定された個々の内発的な領域支配の展開と景虎越山という関東を覆う歴史的條件に規定されたものであったといえるのではないだろうか。

関東中世の生活景観を見るときに、集落域に展開する平地林（屋敷林、境内林）の機能論への注目は新しい視点と思われる。しかし、これを村落景観論一般へと展開できるかは問

題が残るように思われる。関東での景観を復元するためには、在家を視野に入れなければならない。築瀬氏が百姓屋敷として想定されているものは、どのようなものなのか十分にイメージできなかった。以前筆者は、一六世紀の戦国期貫高制の成立の前提には、一五世紀までの在家役が存在することを指摘した。これは直接的には年貢公事収取の問題ではあるが、中世東国の収取構造の変化の背景として、郷請による貫高制の収取の成立の前提には、在家的村落景観から郷村的村落景観への変化があったと見られるのである。中世集落遺跡の画期が一五世紀後半にあることを考えると空間構成の問題としては、屋敷林一般ではなく在家と平地林との関係の考察が必要なのではないだろうか。

以上、評者の関心から一部の論点に言及するにとどまってしまう、また、誤読や誤解の点もあるかも知れませんが、著者や読者のご海容を願う次第です。

〔注〕

- (1) 峰岸純夫「上州一揆と上杉氏領国体制」（『歴史学研究』二八四、一九六四年）、「東国における十五世紀後半の内乱の意義」（『地方史研究』六六、一九六三年のち両論文とも『中世の東国—地域と権力—』東京大学出版会、一九八七年所収）。
- (2) 齋藤慎一「中世東国における河川水量と渡河」（『東京都江

「東京博物館研究報告」四、一九九九年）、「鎌倉街道上道と北関東」（『中世東国の世界Ⅰ』高志書院、二〇〇三年）。

- (3) 久保田順一『室町・戦国期上野の地域社会』（岩田書院、二〇〇六年）『中世前期上野の地域社会』（岩田書院、二〇〇九年）、荒川善夫『戦国期北関東の地域権力』（岩田書院、一九九七年）、『戦国期東国の権力構造』（岩田書院、二〇〇二年）、『戦国期東国の権力と社会』（岩田書院、二〇一二年）、松本一夫『東国守護の歴史的特質』（岩田書院、二〇〇一年）、『下野中世史の世界』（岩田書院、二〇一〇年）、江田郁夫『室町幕府東国支配の研究』（高志書院、二〇〇八年）『中世東国の街道と武士団』（岩田書院、二〇一〇年）、『戦国大名宇都宮氏と家中』（岩田書院、二〇一四年）、またシンポジウムの報告集として桐生文化史談会編『桐生佐野氏と戦国社会』（岩田書院、二〇〇七年）、栃木県立文書館編『戦国期下野の地域権力』（岩田書院、二〇一〇年）江田郁夫・竊瀬大輔編『北関東の戦国時代』（高志書院、二〇一三年）などがあり、両地域に比較してまとまった研究成果の少ない常陸は、佐々木倫朗『戦国期権力佐竹氏の研究』（思文閣出版、二〇一一年）、高橋修編『佐竹一族の中世』（高志書院、二〇一七年）などがある。

- (4) 則竹「『領』と戦国大名―上野国から見た北条氏―」（『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』（高志書院、二〇〇八年）。

- (5) 則竹『戦国大名領国の権力構造』（吉川弘文館、二〇〇五

年）、『動乱の東国史6 古河公方と伊勢宗瑞』（吉川弘文館、二〇一〇年）。

（高志書院、二〇一五年一〇月刊）